

2020/02/02

「良い木とは何か」

「同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。」(マタイ 7:17)

「良い木」とは「自由を手にした木」のことであると、宗教改革者のマルティン・ルターは言いました。自由を手にした人は、良い実を結ぶようになるということです。

■ルターの人生

ルターは、今から 500 年ほど前に宗教改革を行なって、プロテスタント教会の創始者となった人です。

当時のヨーロッパは、子どもの死亡率が非常に高く、平均寿命は 30 歳と言われていました。青年期を迎えることができた人々の平均寿命でさえ約 50 歳でしたから、人々にとって死は非常に身近なものだったのです。ですから、死んでから天国に行けるかどうかは、人々にとってとても興味深いことでした。その当時は、もし悪いことをしたら、その分良いことをして穴埋めをしなければ天国に行くことはできないと教えられていたので、死期を知って十分な備えをして死ぬことが理想で、突然死はたいへん嫌がられていました。

そのような時代に、友人達が相次いで突然死し、自分自身も落雷に遭って九死に一生を得たルターは、このままでは天国に行けないという不安に陥ります。彼は、識字率が 1 割だった時代に大学まで出たエリートでしたが、死の恐怖にあらがえず、ついに自分のキャリアを捨てて修道院に入りました。

修道院に入ったルターでしたが、彼は、自分の罪がキリストによってあがなわれたとはとても思えず、まったく平安がありませんでした。ある時は、生まれてから今に至るまでの罪を、6 時間にも渡って告白し続けましたが、それでもなお赦されたという平安を得ることができませんでした。どんなに頑張っても罪深い自分を知るばかりで、打ちひしがれたルターは、自分はどうてい神の前に立つことができないという絶望の淵に立たされたのです。

しかし、その時、彼は、絶望した者にたった一つだけ残されている福音を発見したのです。それは、「神に助けを請うしかない」「ただ神に助けを請えばいい」ということです。これが、絶望した者に残された唯一の福音なのです。こうして彼は、ついに神の愛を知りました。

それまでの世の中の常識は、愛される者にならなければ、神の愛を受け取ることはできないというものでした。まり、神から愛されるためには、罪から離れ、良い生き方ができるようになることが大切だと考えられていたのです。しかし、語学にたけていたルターは、ラテン語に翻訳される前のギリシャ語の聖書を読み、「悔い改め」と訳されている言葉は本来「メタノー」であり、一瞬一瞬を反省するという意味ではなく、「一生かけて神に向く」という意味であることを知りました。

愛とは「関わり」のことです。ですから、ルターは「神の関わりとは、愛するに値するも

のを見出すことではなく、人を創造すること」だと悟りました。それは、「人は神に愛されるから美しいのであり、美しいから愛されるのではない」ということです。

人は価値あるものを愛そうとしますが、神は、愛する者に価値を造り出します。ですから、私たちの側が神に愛される者になろうと努力する必要はまったくありません。人は、神が関わってくださるから、美しくなるのです。

では、どうやったら神との関わりを手にするのでしょうか。

それは、実に簡単なことです。神は、常に神のほうから私達に関わろうとしてくださっています。ですから、私たちはそれを受け取るだけで良いのです。つまり、「神の呼びかけに応答すること」であり、これが「信仰による義認」と言われるものです。

ルターのように、本気で絶望するなら、神が本気で関わってくれることがわかるようになります。行いで神と関わろうとしても、真実な関わりはできません。

神は、条件をつけずにただあなたと関わり、関わることであなたを美しくします。あなたの表面を覆っている泥を取り除き、神の命を持った本来の輝きを知ることができるようにしてください。そのことに気づくことが自由であると、ルターは知ったのです。

人間は、美しいものを愛します。美しくなければ関わってもらえないため、私たちは人から愛されるために、自分で自分の価値を築くという生涯を送っています。しかし、ここに罠があるのです。人から価値があると認めってもらうためには、相手の期待に応えなければなりません。すると、自分が願うことができなくなり、人の期待に応えようとして生きるようになります。こうして誰もが人の奴隷となりました。人に関わってもらうために、自分で生きたいように生きられず、人の期待に応えようとする生きかたをせざるを得なくなったのです。誰かを愛することも、助けることも、相手に受け入れてもらえなければ虚しく感じ、結局自分のためにやっていることであって、愛ではありません。自分の価値を引き上げ、自分が良く思われたいという動機によるものだからです。これを聖書は、「死の恐怖の奴隷」と言っています。

しかし、あなたがどんな者であるかに関わらず、神は神の側から関わってくださいます。自分で愛される価値を築く必要がないことに気づけば、それが自由なのです。イエス様がこの地上で活動なさっていた時、病人も健康な人も、皆イエス様から関わりに行かれました。神はそういう方なのです。自分で自分の価値を築こうとする必要はありません。

■ 良い木と良い実・悪い木と悪い実

良い木とは、キリストとの関わりを持った木で、自由を得た木のことで、それは、あなたが立派だから得た関わりではなく、神が関わりたいと願ったから得た関わりです。

では、良い木が結ぶ良い実とは何でしょうか。

「同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。」(マタイ 7:17)

ここで使われている「良い」というギリシャ語は、前者が「アガトス——内側が美しい」

という意味であり、後者は「カロス——外側が美しい」という意味です。つまり、前者は神との関係を回復した美しさを指し、後者は人との関わりにおいて見返りを期待せずに愛せるようになった美しさを指しているのです。私達は、美しいから愛されたのではなく、神に愛されるから美しくなったのです。それは、自由を手にした美しさです。それまでは、人から価値を得よう、つまり、愛されるものになろうと期待して人と関わっていたので、美しくなかったのですが、神に愛されていることを知ると、人からの価値を確認する必要がなくなるので、人との関わりも変わってきます。

また、「悪い」ということばも、それぞれ「サプロス——腐っている」「ポネーロス——苦痛の激しい」ということばが使われています。つまり、「悪い木」とは病気にかかった木で、イエス様との関係がまだ回復していない状態のことです。そして、「悪い実」とは、その病気のために苦しんでいる状態を表しているのです。

神との関わりを回復しなければ、病から回復できず、病気の苦しみを味わい続けることとなります。神との関係を回復すると、少しずつ神との関わりが深まっていき、内側が美しくされ、人を愛するという喜びに満たされるように回復していくのです。人は自分の価値を確認するために、人と関わる時に無意識に良い評価を得ようとしてしまいますが、思ったような評価を得られないと落ち込んだり、腹が立ったりしてしまいます。しかし、神との関わりを手にして、自分で自分の価値を築く必要がないとわかると、見返りを期待しないで関わるができるようになっていきます。これが、人に仕える、人を愛するということです。もし腹を立てるようなことがあったら、その人は自由を得ていません。心を神に向けて、永遠のいのちを持っていることを確認し、神に愛されていることを確認しましょう。

このように「良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」という言葉は、行いについて理解しようとするのではなく、神との関わりで捉えましょう。イエス様は、神との関わりを失うことが、どれほどつらくなるのかということをお教えしようとして、このことを語られたのです。

■信じるべきこと

1. 神はあなたと無条件に関わる

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(Iヨハネ 4:10)

「愛する」とは「関わりを持つ」ということです。人間の側から神と関わったのではなく、神様のほうから私達と関わろうとして御手を伸ばしてくださったのです。自分で自分の価値を作ろうとしても、そのようなものは神にとって何の足しにもなりません。あなたは、関わる価値が自分にあるかどうかを気にする必要はないのです。あなたはもともと良きものであり、神はそのことに気づかせようとしておられるのです。

2. 神と関わっている者は、永遠のいのちを持っている

ルターは、死の恐怖に苦しんでいましたが、福音の本質を知って、そこから解放されました。それは、神と関わるようになった者は、すでに永遠のいのちをもっているから、神に裁かれることは決してないという本質です。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」（I ヨハネ 5:13）

最も重要なことは、「あなたはすでに永遠のいのちを持っている」という点です。このことがわかると、人は自由になります。「神の義は、信仰に始まり信仰に進ませる」（ローマ 1:17）とある通り、ルターは死の恐怖から神を求めるようになり、すでに永遠のいのちを持っているから何も恐れなくても良いことを知り、死も人からの評価も神からの評価も気にすることのない自由を得ました。このことを知れば知るほど、人を愛することができるようになり、さらに自由を手にすることができるのです。

このことを信じられるように戦うのが、信仰の戦いです。心の中に疑いや心配ごとがあると、その自由は完全ではありません。それらの疑いや心配ごとを神に祈ること、つまり、心の向きを神に変えていくことは、生涯かけて行うことです。

「悔い改める」と訳される「メタノエオー」は、生涯かけて心を神に向けることによって、自由に気づくことを意味しています。こうして人は、苦しみから解放されます。もう自分のことを心配する必要はありません。神が関わってくださり、永遠のいのちを持っているので、私たちは自由なのです。このことを信仰で受け取れば、人の目から自由になり、人を愛せるようになり、そこに喜びと平安を見出すようになるのです。これが、イエス様が教えておられる「良い木は良い実を結ぶ」ということです。